



全国棚田(千枚田)連絡協議会

棚

田

ライステラス

第26号 2002.7.20
(季刊・年4回発行)

発行/全国棚田(千枚田)連絡協議会

編集/ふるきやらネットワーク

〒169-0073 東京都新宿区百人町1-23-29-202

TEL 03-5389-9937/FAX 03-5389-0078

http://www.yukidaruma.or.jp/tanada/



千葉県鴨川市大山千枚田

「棚田と織りなす
新たな生き方」

(株)インサイダー編集長

高野

孟

私が安房鴨川の山の中、大山千枚田からさらに奥に入った過疎村に広がる棚田で田植えをし、畑作りや森林整備の作業にも取り組むようになって5~6年になる。

その最初のきっかけは、50歳になって「俺もあと10年で還暦かあ」と思って、同じ昭和19年生まれの友人たちに声をかけて「10年後の還暦をどう迎えるか」を研究すると称して飲み会を発足させたことだった。このまま忙しい、忙しいと言いながら気が付いたら還暦というのでは、人生一回こっきりで終わってしまう。ここらでちょっと一休み、人生の二毛作目を考えたほうがいいんじゃないか、ということで、19と一休みをかけて「一休会」と名付けられたその会合のメンバーのひとりが、その過疎村に20年近く住んで農事組合法人「鴨川自然王国」を作っていた藤本敏夫(と言って分らなければ加藤登紀子と獄中結婚した元全学連の闘士)で、彼に誘われてそこを訪れて、「東京から1時間半か2時間のところに、こんな農村風景があったのか」とすっかり感激した。

しかし、近寄って見れば、村は人が少なくなり、田や畑は次第に放置され、森は手入れもされずに真っ暗になって病に冒されている。見るに見かねて農林作業のボランティアのようなことを始めて、そのうち棚田や大豆畑の保全のためのトラストを組織して、年間日程を組んで、たくさんの仲間とともに月1~2回のペースでそこに通うようになった。そして、ただ通うのではなく、いずれはここに半定住のような形で、いきなり都会を離れることは出来ないけれども生活の本拠は田園にあるといった“多重生活”のスタイルを作り上げたいと思うようになった。

都会の喧噪と汚濁、食の安全の破綻、人間としての心身能力の低下といった生活の全面的な危機を跳ね返す新しい生き方の根源が、私にとっての棚田である。

特集

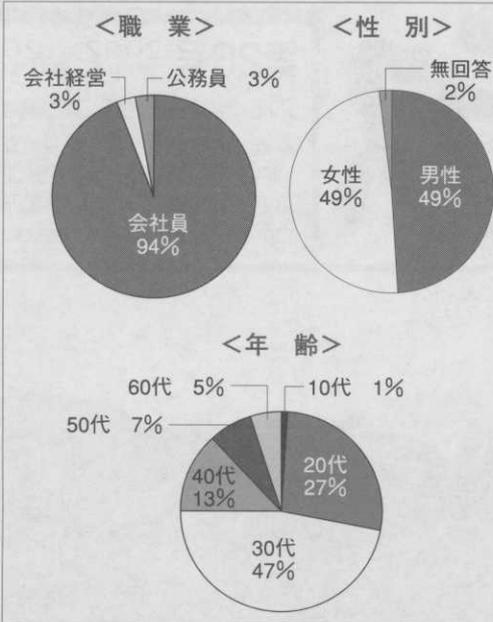
都市からみた棚田

都市サラリーマン・サラリーウーマン175人、都内高校生81人、合計256人が

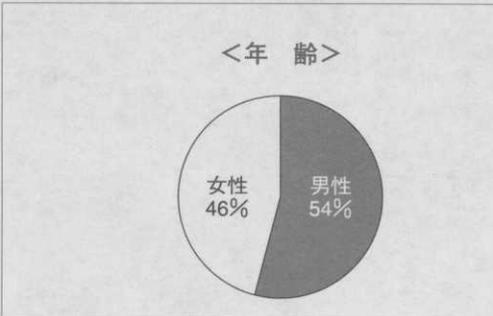
答えてくれた「都市から見た棚田」

2002年5月から6月にかけて、東京都心に勤めるサラリーマン・サラリーウーマン（以下、サラリーマンと表記）を中心に175人（男性87人、女性85人、無回答3人）からアンケート回答を得ることができた。あえて丸の内、日本橋、赤坂などの東京都心部に勤める人をターゲットにアンケートをお願いしたのは、日本経済の中心地にいる人々と判断したからである。回答を求めた結果、20〜30代が7割強を占めるといった若い世代中心からの回答となった。また同時期、豊島区にある某私立高校の生徒81人（男性44人、女性37人）から回答を得ることができた。東京育ちの10代である。総人数256人ではあるが、ここからどんな「棚田像」が見えてくるのであろう。

サラリーマン



高校生



【アンケート内容】

棚田に関する意識調査アンケート

性別: 男性 女性 (いずれかに○をつけてください)
 年代: 10代以下 20代 30代 40代 50代 60代 70代 80代以上
 職業: 学生 会社員 公務員 その他

問1: 「棚田」という言葉を知っていましたか? (いずれかに○をつけてください)
 はい いいえ

問2: 問1で、「はい」に○をつけた方にお聞きします。どこでお知りになりましたか? 以下のなかから1つ選んで○をつけてください。
 a. テレビで b. ラジオで c. 新聞や雑誌で d. お米屋さんなどお店で
 e. 棚田保全のイベント等で f. 棚田サミット開催を知って g. 昔から知っている h. 地元にあった i. 友人や知人から j. 仕事からみで k. その他

問3: 実際の「棚田」を見たことはありますか? (いずれかに○をつけてください)
 はい いいえ

問4: 問3で、「はい」に○をつけた方にお聞きします。どの棚田をご覧になりましたか? 地域名等をお書き下さい。()

問5: 「棚田」と聞いて、あなたはどんなことを連想しますか? あなたの連想にもっとも近いものを1つ選んで○をつけてください。
 a. 美しい景色 b. せまくて小さな田んぼ c. 農作業がたいへん d. なつかしい e. 環境保全 f. お米がおいしそう g. 特別にも連想しない h. 棚田サミット i. その他

問6: 棚田地域に行ってみたいと思いますか? (いずれかに○をつけてください)
 はい いいえ

問7: 問6で「はい」に○をつけた方にお聞きします。棚田地域に出かけて、どんなことをしたいですか? (あてはまるものに○をつけてください。複数の場合3つまで可)
 a. 棚田散策 b. 農作業体験 c. 棚田や周辺の山で環境学習 d. 撮影 e. 地元の人と交流 f. 棚田オーナーになる g. 棚田保全ボランティア

都市のなかで、ほんとうはどのくらいの人々が棚田を知っているのだろうか。どのくらいの人々が関心をもってくれているのだろうか。わたしたちが取り組んできた棚田保全の活動をどのくらいの人々が知っているのだろうか…。そんな疑問から、今回「都市から見た棚田」の特集を組んだ。主に、東京の中心部に勤める若いサラリーマン・サラリーウーマン、また豊島区に通う高校生に「棚田に関する意識アンケート」をお願いした。もちろん、この回答がすべてではない。偏りもあるだろう。しかし何らかの傾向を読み解くことはできるだろう。

ア h. 地元の祭りに参加 i. 貸別荘等で週末生活 j. 農家のお宅にホームステイ k. 調査研究 l. すでに棚田オーナーである m. すでにボランティア等に参加した n. その他

問8: 「棚田米」と聞いてどのようなことを思い浮かべますか? (あてはまるものに○をつけてください。複数の場合3つまで可)
 a. おいしそう b. 高い c. 手に入りにくい d. どこで買えるかわからない e. 食べてみたい f. 高くても購入したい g. 安ければ購入したい h. 特別に何も思わない i. すでに購入して食べている j. 実際に食べておいしかった k. その他

問9: 棚田保全の活動があることを知っていましたか?
 はい いいえ

問10: 棚田保全をする必要があると思いますか? (いずれかに○をつけてください)
 はい いいえ わからない

問11: 問10で「はい」に○をつけた方にお聞きします。その理由をお教えてください。(あてはまるものに○をつけてください。複数の場合3つまで可)
 a. 国土・環境保全のため b. 農地荒廃への不安から c. 美しい景観を残すため d. 日本の原風景の保護 e. 文化的価値があるから f. 農山村の人々の暮らしを守るため g. 世間で大切だといっているから h. 大切そうだから i. その他

問12: 問10で「いいえ」に○をつけた方にお聞きします。その理由をお教えてください。(あてはまるものに○をつけてください)
 a. 減反政策に反するから b. 効率の悪い棚田でお米をつくる必要はないから c. とくに価値がわからないから d. その他

問13: あなたが、棚田地域(農山村)とかわるとすれば、次のうちどのようなスタイルが望ましいと思いますか? (あてはまるものに○をつけてください。複数の場合3つまで可)
 a. たまに旅行等で出かける b. 棚田保全運動にかかわる c. 棚田で行われるイベント等に参加 d. 棚田ボランティアとしてお手伝い e. 棚田米や棚田地域の加工品の消費者 f. 棚田農家と友人としてのおつきあい g. 棚田オーナーになる h. 棚田地域で週末生活 i. 地元に住みつき、棚田で農業をする j. 子どもの教育の場に活用したい k. あまりかわりたくない l. その他

問1 問2 「棚田」を知っていると答えたのは、サラリーマンでは66%、高校生は16%

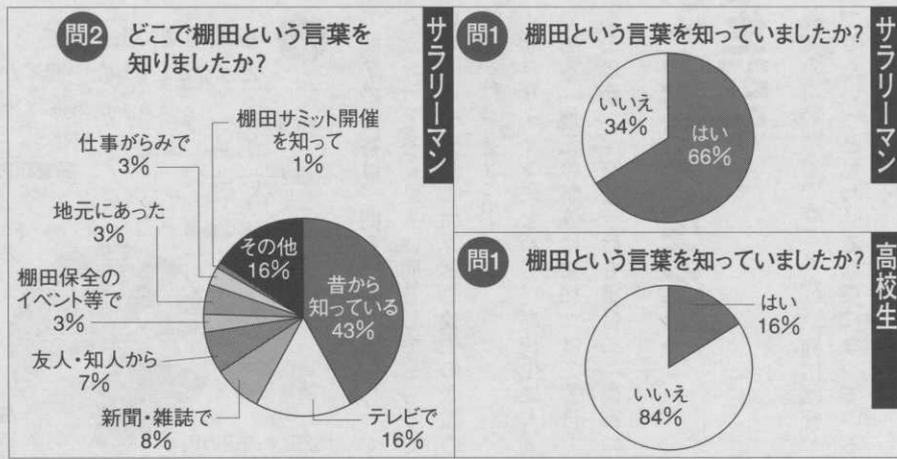
アンケートをお願いしたところ、「棚田」という言葉を知らないので、これ以上進めません」という回答者が何人かいた。問いの不備をなげいたが、「棚田」という言葉は知らないが、漢字から推測して回答を進めた」という声にも出会った。1995年、全国棚田（千枚田）連絡協議会発足当時、「棚田」という言葉が、一般的でなかったことを思えば、（ちなみに今回「千枚田」という用語を入れなかったのは、アンケートが煩雑になるのを防ぐためである）サラリーマンの66%（115人）が「知っている」という数字は高いと判断したい。なかでも男性、女性別で比較してみたところ、男性の75%、女性の58%が「知っている」と回答しており、男性の方が「棚田」という言葉を知っている人が多いことがわかった。

そして「知っている」と回答したサラリーマン115人への「どこで知ったのか」という問いでは、43%（50人）が「昔から知っている」と回答。しかしながら「地元にあった」という回答はわずかに3人にすぎないことから、経験的に知っているというよりも情報、概念として理解しているといえるだろう。

また「テレビ、新聞から」という回答は、あわせて24%（27人）。この数字から広報活動、PRの成果を感じるとともに、さらなる必要性を感じるのも確かである。ちなみに、「その他」のなかで多かった回答は、「学校、社会科の授業で」とい

うものが8名あったほか、「親が棚田オーナーになって知っている」という回答が1名あった。なかには、こうした人もいるのである。

一方高校生の回答は、「棚田」という言葉を知っていたのは、16%（13人）にすぎなかった。それらを知った経緯でもっとも多かったのは、「授業で」という回答で5人いた。



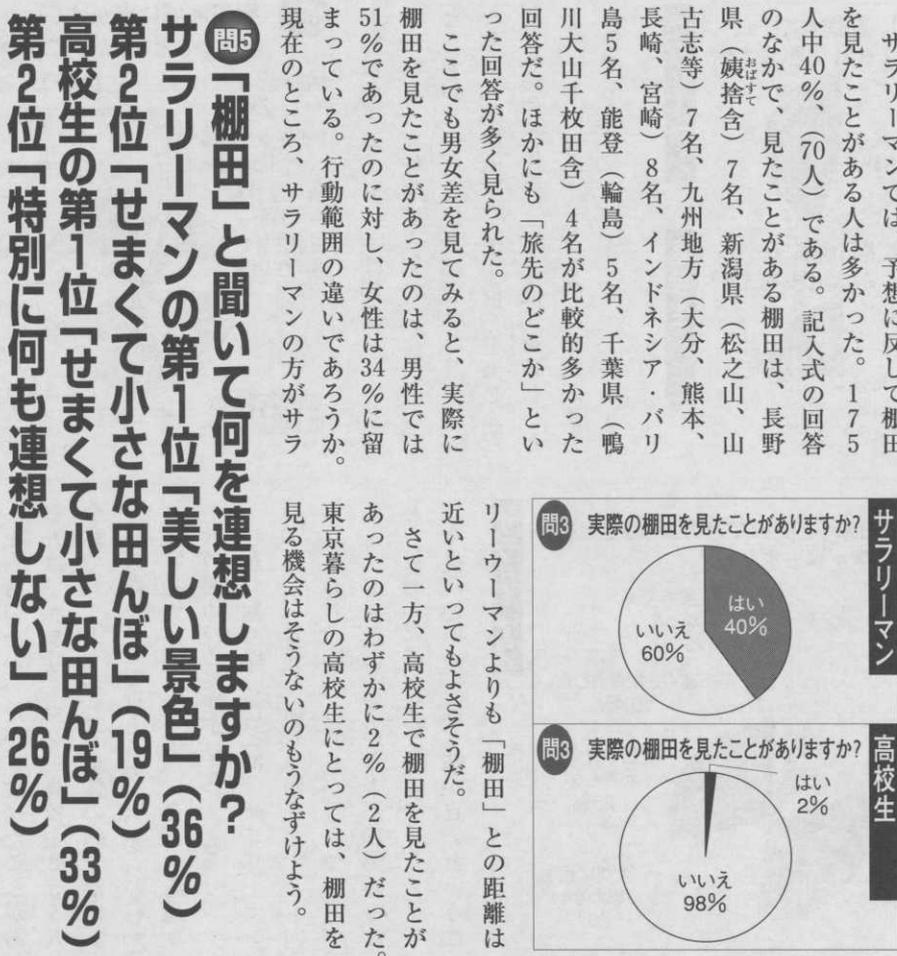
問3 問4 実際に棚田を見たことがあったのは、サラリーマン40%、高校生はわずか2%

サラリーマンでは、予想に反して棚田を見たことがある人は多かった。175人中40%、(70人)である。記入式の回答のなかで、見たことがある棚田は、長野県（姨捨^{おはすて}舎）7名、新潟県（松之山、山古志等）7名、九州地方（大分、熊本、長崎、宮崎）8名、インドネシア・バリ島5名、能登（輪島）5名、千葉県（鴨川大山千枚田舎）4名が比較的多かった回答だ。ほかにも「旅先のどこか」といった回答が多く見られた。

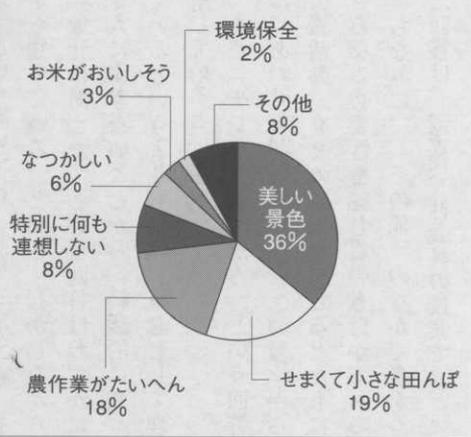
ここでも男女差を見てみると、実際に棚田を見たことがあったのは、男性では51%であったのに対し、女性は34%に留まっている。行動範囲の違いであろうか。現在のところ、サラリーマンの方がサラ

リーマンよりも「棚田」との距離は近いといってもよさそうだ。

さて一方、高校生で棚田を見たことがあったのはわずかに2%（2人）だった。東京暮らしの高校生にとっては、棚田を見る機会はそのようなものなすけよう。

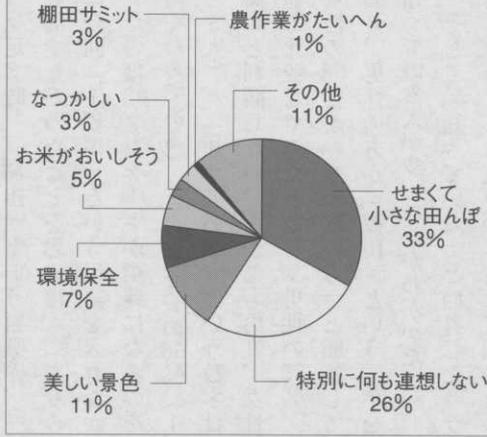


問5 「棚田」と聞いて
どんなことを連想しますか？



高校生

問5 「棚田」と聞いて
どんなことを連想しますか？

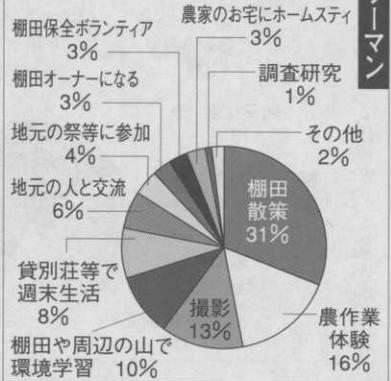


問6 「棚田に行ってみよう」と答えたのは、
サラリーマン46%、高校生27%

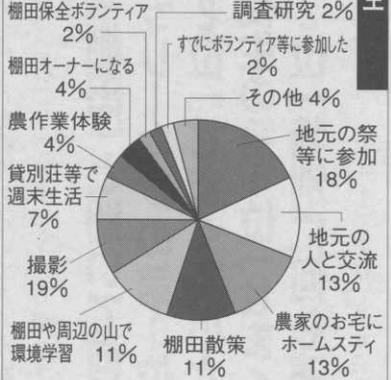
サラリーマンで「棚田に行ってみよう」と答えたのは、46% (80人) だった。問5の回答と照らし合わせてみると、「棚田」と聞いて「美しい景色」を連想した66人中の44人、つまり67%の人が「棚田に行ってみよう」と答えていた。「美しい景色を

問7 棚田に行ってみたいことは、サラリーマン
第1位「棚田散策」、第2位「農作業体験」
高校生第1位「地元の祭等に参加」、
第2位「地元の人と交流」
「農家のお宅にホームステイ」

問7 棚田地域に出かけて
どんなことをしたいですか？



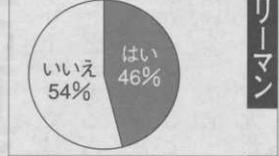
問7 棚田地域に出かけて
どんなことをしたいですか？



問7の回答は、問6で「棚田に行ってみよう」と答えた人に回答してもらっているが、サラリーマンと高校生の意識の違いがはっきりと出た。
サラリーマンにとって、高校生に人気のある「地元の祭等に参加」は7番目であるほか、「交流」は6番目、「農家の

お宅にホームステイ」は10番目という順序である。高校生に人気の「交流」や「人とかかわる」こと以上に、サラリーマンたちは「棚田散策」(第1位)を楽しんだり、「農作業体験」(第2位)を楽しむといったレクリエーション的な感覚が強いようである。

問6 棚田地域に行ってみようと思いますか？



問6 棚田地域に行ってみようと思いますか？



「棚田に行ってみよう」ということが、「棚田に行ってみよう」と思わせる動機になっているといえそうである。
一方、高校生を見てみると、「棚田に行ってみよう」と答えたのは27% (22人) にすぎず、このことから、「棚田に行ってみよう」と思える動機となる情報がないことが見えてくる。

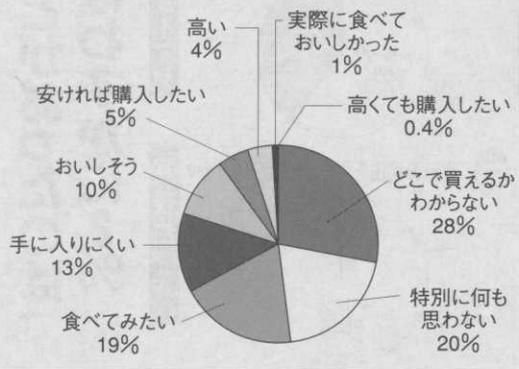
問8 「棚田米」を食べている人は0%、食べたことがある人は、
256人中3人だけ！

残念ながら「棚田米」の普及度及び知名度はまだまだ低いといわざるを得ない。すでに購入して食べている人は、もちろん1人もいなかったが、食べたことがある人は、サラリーマン・高校生256人全体でも3人。そして全体の約3割にあたる人が「どこで買えるのかわからない」と回答していることから、PRや流通ルートの開拓の必要性が見えてくる。

しかも胸の痛いことに、サラリーマンの20%が「特別に何も思わない」とも回答しており、関心の低さが目立つ一方で、「食べてみたい」という人が19%いることも見逃してはならないだろう。

今後「棚田米」は、味が良いというこ

問8 「棚田米」と聞いてどのようなことを思い浮かべますか？



問9 問10 柵田保全の活動があることを知っていたのは、

サラリーマンで22%、高校生ではたった1%、

柵田を保全する必要性が「ある」と答えたのは、

サラリーマン44%、高校生14%、

「わからない」がサラリーマン52%、高校生81%

柵田という言葉は知っていても、柵田の保全活動は意外に知られていなかった。サラリーマンで22% (39人)、高校生ではたった1% (1人) が柵田の保全活動を知っていた。近年新聞やTVなどメディアで多く取り上げられている柵田の保全活動も、まだ都市部にはうねりとして届いていない。ましてや高校生にはほとんど知られていないという現状だった。

そして、特筆したいのは、次の問10「柵田を保全する必要があると思いますか」という問いかけに多くの人が「わからない」と回答したことである。サラリーマンで52% (91人)、高校生においては81% (63人) にも及んでいる。

保全の必要性が「ある」と答えた人もサラリーマンでも半数に満たず44%。高校生では14%である。この数字はともすれば、柵田保全不要説の根拠として利用されかねないが、「保全すべきでない」と回答しているのは、サラリーマンでたった2% (4人)、高校生で5% (4人) にすぎない。

つまり、柵田や中山間地域の現状、価値、魅力などが一般の人にまだまだ知られていないのである。保全活動があることすら伝わっていないのが現状なのだ。

ここで、一つの傾向を拾い出してみた。

問3で「柵田を見たことがありますか」との問いに「はい」と答えたサラリーマン70人のうち56%が「保全の必要がある」と答えたのに対し、「いいえ」と答えた人のうち「必要がある」と答えたのは、105人中35%に留まっていた。

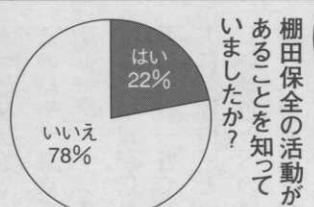
さらに「保全すべきかどうかわからない」という回答は、「柵田」を見たことがあるサラリーマン70人中では、27%であったのに対し、見たことがないサラリーマンでは105人中61%の人がそう回答した。

つまり、実際に柵田を見たことがある人の方が、保全意識は高いといえるのではないだろうか。柵田を見たことのある人の6割弱が「柵田を保全すべき」と回答しているのに対し、見たことがない人の6割強は「保全すべきかどうかわからない」と回答しているのだ。このことは、都市の人にもまず、柵田を見てもらうこと、足を運んでもらうことの重要性をものたっている。

これから本協議会としても、保全活動の積極的なPRのほか、広く都市住民の人々が、柵田地域に足を運びやすくする方法を検討することも必要ではないだろうか。

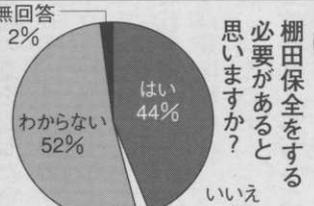
サラリーマン

問9 柵田保全の活動があることを知っていましたか?



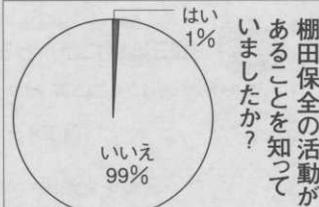
サラリーマン

問10 柵田保全をする必要があると思いますか?



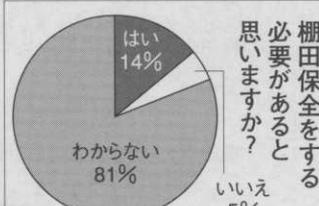
高校生

問9 柵田保全の活動があることを知っていましたか?



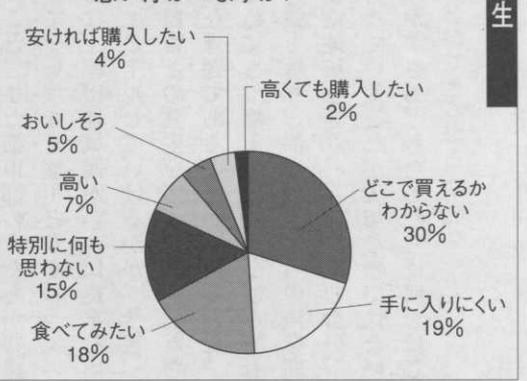
高校生

問10 柵田保全をする必要があると思いますか?



高校生

問8 「柵田米」と聞いてどのようなことを思い浮かべますか?



とだけでなく、環境や景観・文化も守るといった付加価値を明確に打ち出し、価値を多くの人に知ってもらい、理解してもらうことが必要であろう。そのためにも全国的にPRを展開し、流通との提携市場開拓を進めていくことが、今後の柵田保全に必要な不可欠といえるのではないだろうか。

問11 **問12** 保全の必要性の理由としてあがったのは、(サラリーマン) 「美しい景観を残すため」20%、「日本の原風景の保護」20%、「国土・環境保全のため」20%

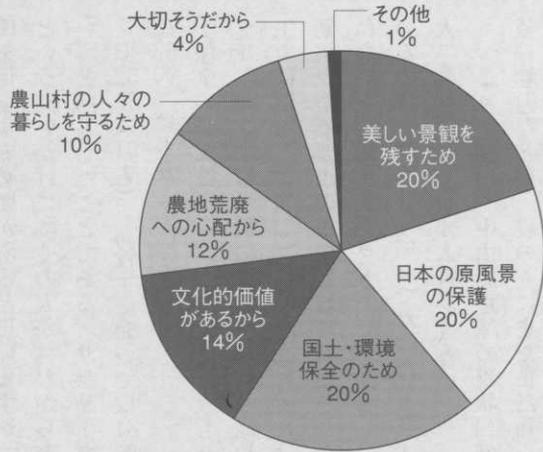
保全の必要があると答えた人へのみ、その理由をたずねたところ、サラリーマン、高校生をあわせると、「美しい景観を残すため」20% (39人)、「日本の原風景の保護」20% (38人)、「国土・環境保全のため」20% (38人)のほか、「文化的価値があるから」14% (26人)、「農地荒廃への不安から」12% (22人)、「農山村の人々の暮らしを守るため」10% (19人)、「大切そうだから」4% (7人)と続いている。

その一方、問11で保全の必要がないと答えた人に、その理由をたずねたところ、「とくに価値がわからないから」15人、「効率の悪い柵田でお米をつくる必要はないから」5人、「減反政策に反するから」4人という回答があった。こうした意見は少数派であるが、柵田の価値が伝わっていない結果の回答であると考えられる。

都市の人たちが棚田保全に乗り出し、地元の人と一緒に、草刈りに参加。
(千葉県鴨川市大山千枚田にて)



問11 棚田保全をする必要があると思う理由は何ですか？



問12 あなたが棚田地域にかかわるとしたら？

その問いに「一番人気だったのは「たまたに旅行で出かける」サラリーマン38%、高校生35%

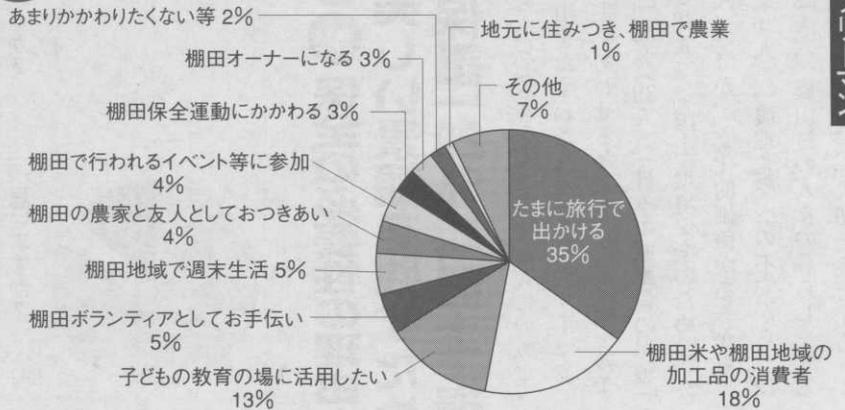
棚田地域にかかわるとすれば、どうい
うかわりを望んでいるのか、たずねて
みた。サラリーマンの第1位は、「たまた
に旅行で出かける」38%（99人）。第2位「棚
田米や棚田地域の加工品の消費者」20%
（51人）、第3位「子どもの教育の場に活
用したい」13%（36人）と、消費者とし
ての視点や親としての視点のものが2位
3位となり、関心が高いことがわかる。
サラリーマンのうちでも男性と女性の
動向を比較すると、意外に「子どもの教
育の場に活用したい」を選択したのは男
性陣が多かった。男性25人、女性11人
という内訳である。

そして「棚田米や棚田地域の加工品の
消費者」を選択したのは、女性の方が多
かった。女性35人、男性16人。棚田米や
加工品購入の関心の高さは、女性たちの
方にあるようだ。

高校生も第1位「たまたに旅行で出かけ
る」35%（30人）、第2位は「棚田ボラン
ティアとしてお手伝い」18%（16人）と
続き、高校生では、ボランティア活動へ
の関心がある人も多かった。

旅行に訪れた都市の人たちとどうつな
がりをつくっていくかも今後の課題だ
ろう。

問13 棚田地域にかかわるとすれば、どのようなスタイルが望ましいと思いますか？

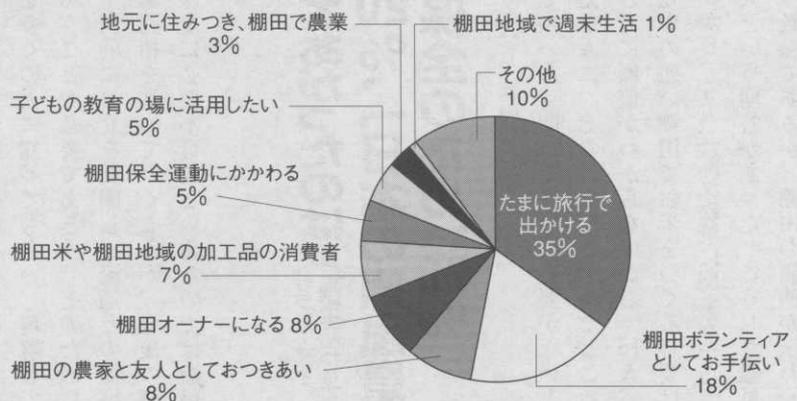


以上が、13の問いに256人の人々に
答えてもらった結果である。ご協力くだ
さったみなさんに感謝の意を表したい。
この結果、東京の高校生、都市部のサラ
リーマン・サラリーウーマンたちに、ま
だまだ情報が伝わっていないという感が
否めない一方で、時代の流れのなかで着
実に「棚田」という言葉は知られ、「美
しい景色」への憧れ、「たいへんな農作
業」への共感も少しずつ生まれてきてい
ることが見えてきた。

もらうこと、また都市部の人たちが共感
をもつて、無理なく棚田とかわわって
ける方法を棚田地域側がいか提案し
意し、アピールしていけるかが、今後、
都市と農村との共生をめざすわたしたち
の重要な課題であることが見えてきた。
そのためにも、都市の人に足を運んでも
らう対策を練り、都市の人たちの声を聞
き、また地域を語り、互いに話し合い、
知り合っていくことが大切なのではない
だろうか。さあ、わたしたちは何をほし
めることができるだろうか。

文責：石井里津子

問13 棚田地域にかかわるとすれば、どのようなスタイルが望ましいと思いますか？



千葉県鴨川市 大山千枚田

取材・文：石井里津子

都市との共生をめざす



「大山千枚田」を背に、石田三示大山千枚田保存会長(50)

「都市と農村の共生」。言葉でいうのは簡単だ。が、そこに辿り着くためにどんな手順を踏めばいいのか。そして「共生」が何を生み出すのか。「東京にもっとも近い棚田」をキャッチフレーズにした千葉県鴨川市大山千枚田へ一つの答えを探しに出かけた。

東京駅から2時間足らずで、特急電車と車を乗り継いで鴨川市大山千枚田に着いた。海のリゾートとして名高い房総半島のイメージとは打って代わって、静かな山あいの風景が連なり、まだ耳に残っていた東京のざわめきが急速に影をひそめた。

通称「大山千枚田」3町2反。棚田百選にも選ばれ、マスコミに何度も登場し、有名になった眺めである。実はこの字名は「小金」というのだそうだ。しかし'97年の保存会発足時にメンバーは、この呼び名を「小金千枚田」とはし

なかつた。最終的には、大山地区(旧大山村)すべての棚田や農地の保全をめざすがゆえ、まずその第一歩として、景観の良いこの3町2反を「大山千枚田」と名付けて掲げ上げ、保全活動に乗り出していったのである。

大山千枚田保存会の実行力

大山千枚田保存会の実行力は他で類を見ないほどだ。組織づくりもうまい。保存会会員は3種。1号会員Ⅱ地権者21名、2号会員Ⅱ鴨川市内116名、3号会員Ⅱ市外230名、現在合計367名である。市外会員が半数近くを占めているのは、都市住民を巻き込むため、マスコミ等の協力を得て募集した結果だ。さらに年会費1000円という価格も、都市と農村のあいだの壁を低くした。保存会の役員15人中、地権者は3名のみ。しかも大山地区外

の人も役員になっている。50代を中心に60代前半が顔を揃え、地域の「元氣人」が地権者を支えながらフットワークを軽く、活発に活動を展開している。

簡単に活動を追いかけてみよう。保存会発足以降毎年、棚田サミットに参加し、視察にも出かけた。一方地元では、棚田シンポジウムやフォトコンテストを開催し、市民グループ「棚田市民ネットワーク」(中島峰広早大教授代表)の協力も得て復田や田植え・稲刈りツアーの実施によって、地権者たちも交流の喜びを少しずつ感じ取るようになってきた。

そして大きな変化をもたらしたのは、'98年のNHK番組での紹介、'99年の東京日本橋三越本店で開催した「棚田パノラマ体験展」(全棚協主催)であったという。地元棚田米でつくりはじめた日本酒も売り込み、「東京にもっとも近い棚田」を広く世間

にアピールした。そして2000年春、市として「棚田オーナー制度」を開始。3年目の今年は応募総数209組中136組が選ばれた。2001年には、保存会で「大豆トラスト」をスタート。さらにこの年、市からの援助も大きく取り付け、大山千枚田に隣接して、オーナー制度を運営する拠点「棚田倶楽部」(鴨川市地域資源総合管理施設)が建てられ、常勤のスタッフを置くこともできた。

そのほか、自然観察会やウォーキング大会も開催中だ。

今年2002年には、保存会独自の「棚田トラスト」をはじめた。トラストは、オーナーと同額年間3万円だが、「マイ田んぼ」をもつのではなく、一定の面積を参加者全員で作業し、そこで獲れた米を均等にわけるといふもの。今年33組約100人が選ばれた。そして、この8月末には第8回全国棚田サミットが開催される。

棚田トラストで

「はじめての棚田」体験

訪れた6月16日は、トラスト会員の草刈りの日。千枚田は、家族連れなどで賑わっていた。草刈りより昼食の準備が得意という人は、棚田倶楽部に残ってバーベキューの用意だ。数年前に横須賀から移り住み、保存会広報委員長を務める「川康伸さんはいう。「オーナーは自分の田んぼをやりきらなきゃいけないけど、トラストは、みんなでするから途中でめげてもいい。初めての人向きですよ。いきなりオーナーもたいへんですからね」。

親子2世代、しかも孫の赤ちゃんを連れ、横浜から参加していた家族がいた。「いいだしっぺは、おばあちゃん!」。定年を迎え、夫婦で参加するつもりが、息子夫婦も参加したいと、みんなで来ることになったという。農作業は、おばあちゃん以外全員はじめて

だが、みんな夢中になってカメラを握り、草と格闘していた。

またインターネットを見て応募したという50歳の女性は、「主人が、体調を崩した私を心配して申し込んでくれたんです。ストレスが原因で、食べものはのどを通らず、立っていられなくて。それが田植えに来たら、食欲も出はじめ、元氣になって。自然ってすごいですね」。

共生が、地元を変える

保存会の役員をはじめ、世話をしているメンバーたち(支援者と呼ばれている)の顔が一人ひとり活気づいていた。声は自信によって支えられ力強く、交わし合う笑顔もおおらかで魅力的だった。5年間の活動実績が、着実に地元を変えていた。保存会広報副委員長の首藤悦子さんはこう話す。

「知らない人にもどんどん話しかけられるようになりましたよ。棚田という共通点があるからかもしれない。しかも地元の人たちとも話をするようになった。いままでは自宅と職場の往復だけだったのに、オーナーさんといっしょになって棚田や環境のこと、地元のことを勉強してきたのもよかつたかな」。

地域が開かれていた。この5年、保存会のメンバーたちは、自分たちのつながりを固めながら、

都市の風が入ってくるための窓をいくつも開け、流れ込んだ風によって自分たちを刷新し続けてきた。共生のはじまりは、人と人との出会いではなかるうか人と人が出会って、交流して変化していく。変化が自信と勇気をもたらし、それが保全への力となって、進んでいく。

いま、千枚田周辺をはじめ、千枚田へ向かう道に多くの花の苗木や花株が植えられている。

「ここは異空間なんです。みんな都市からやって来て、心安らぐ異空間を求めている。もともとここにそんな場所にしたかった。」

石田三示保存会長がいう。復田も進む。全国から集まった大学生ボランティアたちも訪れ、美しい景観がよみがえりつつある。周辺の荒れた田んぼもなくなり、いく。それが保存会の夢だ。

「棚田の保全は地元だけではやっていけない。これからどうしたって都市と共生していくしかない。いま、共生によって保全していく確かさを感じています。」

その夜、ホタルを見に連れていってもらった。近年ホタルが帰ってきたという。山あいの田んぼの上をホタルが乱舞し、小さな光が無数に輝きを放ち、わたしたちを包んでくれた。棚田の空間では、小さな生きもの人が無理なく共生している。都市と農村の共生も棚田ならうま

第8回 全国棚田(千枚田)サミット間近!!

2002年8月30日(金)～9月1日(日) 千葉県鴨川市

みんなを誘って出がけませんか?

テーマ:「棚田と都市・保全と共生」

第8回全国棚田サミットが、「東京にもっとも近い棚田」として有名な千葉県鴨川市大山千枚田を中心に開催されます。今年の日目は10もの分科会。そして3日間にわたって議論、そして交流を深めようという意気込みで満ちています。ふるってご参加ください。

【開催日程】

第1日目	8月30日(金)	9:00～9:50	全国棚田(千枚田)連絡協議会理事会	鴨川グランドホテル
		10:00～11:50	全国棚田(千枚田)連絡協議会総会・首長等会議	〃
		11:50～13:00	昼食	〃
		13:00～13:30	開会式	鴨川市民会館
		13:30～14:50	特別記念講演 千葉県知事 堂本暁子	〃
		15:00～16:00	事例発表	〃
			①千葉県大山千枚田の保全	
			②徳島県上勝町八重地のほ場整備 ③福岡県浮羽町棚田米の販売	
16:10～17:30	市内めぐり 一大山千枚田、みんなみの里一	現地・バス移動		
18:00～20:00	全体交流会	鴨川市文化体育館		
20:30～22:00	交流会二次会	鴨川グランドホテル		
第2日目	8月31日(土)	9:00～12:00	分科会	市内ホテル6ヶ所10会場
		12:00～13:20	昼食	〃
		13:20～15:00	分科会発表	鴨川市民会館
		15:00～15:10	共同宣言	〃
		15:10～15:20	閉会式	〃
		<第1部終了> <第2部開始>		
18:30～20:30	ミュージカル映画 ふるさときゃらばん制作	鴨川市民会館		
第3日目	9月1日(日)	■棚田に集う、学ぶ、創る、味わう、楽しむを切り口としてイベントを展開します。		
		10:30～16:00	1. ステージイベントの開催 ※現在企画中! <ヨサコイソーラン(棚田バージョン・オリジナル)踊りなど、ユニークな催しも企画中>	大山千枚田特設ステージ
		2. 郷土料理教室の開催 (太巻き寿司、カッターチーズなど)	棚田倶楽部	
		3. 大山千枚田一日環境大学(仮)開校 (大学生、NPOによる自主フォーラム)	大山青少年研修センター	
■ファイナルイベント		大山千枚田		

【分科会内容】

- | | | |
|--|---|---------------------------------------|
| ①オーナー制度の運営と棚田
コーディネーター:早稲田大学教授 中島 峰広 | ②地域づくりと棚田
コーディネーター:東京農工大学教授 千賀裕太郎 | ③米流通と棚田米
コーディネーター:高崎経済大学教授 吉田 俊幸 |
| ④環境教育と棚田
コーディネーター:東京学芸大学教授 小泉 武栄 | ⑤生物多様性と棚田保全
コーディネーター:宇都宮大学教授 水谷 正一 | ⑥ボランティアと棚田
コーディネーター:愛媛大学教授 岸 康彦 |
| ⑦棚田のほ場整備
コーディネーター:信州大学教授 木村 和弘 | ⑧「田舎暮らし」の現実と課題
コーディネーター:滋インサイダー編集長 高野 孟 | ⑨棚田景観の保全と活用
コーディネーター:東京農業大学教授 麻生 恵 |
| ⑩日本の農業の再生と棚田
コーディネーター:農と自然の研究所代表 宇根 豊 | 【交通機関】 ■JR(特急)東京～蘇我～鴨川2時間 ■定期バス(アクシー号)浜松町～東京駅八重洲口～アクアライン～鴨川駅西口2時間20分 ■直通バス(サミット専用)羽田～アクアライン～鴨川1時間30分(往路:8月30日11:00羽田空港発→鴨川市民会館) | |

【問い合わせ先】 鴨川市農林水産課 TEL0470・93・7834

全国棚田(千枚田)連絡協議会会長が替わります

会長を退任します

福岡県浮羽町長

堀 万治



この一年を振り返りますと、千枚田で名高い輪島市で全国棚田サミットが盛会に開催され、棚田保存の意義や棚田を通じた地域活性化への取り組み、棚田と森林の共存共栄の働きに感動いたしました。棚田は今、すばらしい環境を育み公益的な機能を生み出しながら、おいしいお米を作る生産地として、また、日本の原風景という景観を生かした都市と農村の交流の場として、広く国民に知られるようになってきました。

その一方で、たいへんな苦勞でその棚田が守られて受け継がれています。中山間地域等直接支払制度で新しい棚田地域の活性化が始まりましたが、まだ多くの国民の理解が必要だと考えます。その大切さをもっと深く訴えていき、都市と農村が協調し、お互いの英知を連動させていくことが本協議会に求められていると思います。棚田をキーワードに、IT情報伝達等を活用しながら、国民一人一人に棚田保存の意義を浸透させていくことも大事ではないかと考えます。21世紀はコミュニケーションのあり方が問われます。これからの棚田を舞台としたコミュニケーションが深まりますよう心から願っています。

最後になりましたが、第7回全国棚田サミットでは、梶市長さんをはじめ、実行委員会の皆様の協力により、盛会に開催できましたことに、心よりお礼申し上げますとともに、協議会役員並びに会員の皆様に感謝申し上げます。本協議会のなお一層の飛躍を祈念し退任の挨拶といたします。

会長に就任します

石川県輪島市長

梶 文秋



今年度、会長をお引き受けした輪島市長の梶でございます。

昨年開催いたしました第7回全国棚田(千枚田)サミットでは、全国各地より多数の皆様にご参加いただき、誠にありがとうございました。

北前船の寄港地として開かれてきた本市にある白米の千枚田は、先人が、地滑りによって出来た土地を、英知を結集して維持してきたものであり、その苦勞を忘れず、保水力に優れた国土を保全し生き物を育んできた大切なこの棚田を後世に引き継いでいかなければならないという思いでこれまで保全してまいりました。

サミットでは、本市だけでなく各地域がそれぞれ諸問題を抱えていることを知ると同時に、国・県のご支援や棚田に多くの方が目を向けてくれていることを知り心強い思いもしました。

私事ですが、本年4月に市長2期目のスタートを切った際に、初心に返って市政を行うと市民の方に約束しましたが、棚田保全についても同様に、初心に返って、微力ではありますが全力で取り組んでまいりたいと考えております。

全国棚田(千枚田)連絡協議会をもっとオープンにし、一人でも多くの方に棚田を理解していただき、人の輪を広げ、農村文化や農林水産業等トータルで取り組むことが棚田保全に繋がると考えておりますので、会員の皆様や棚田に熱い思いを寄せる皆様方の更なるご支援をお願い申し上げます。会長就任の挨拶といたします。

事務局 ニュース

事務局、石川県輪島市からのお知らせコーナーです。

平成13年度事務局の福岡県浮羽町様ご苦勞様でした。

今年度より協議会の事務局をさせていただき「石川県輪島市(漆器観光課)」です。会員の皆様、関係者の皆様、至らない点あるうかと思いますがどうぞよろしくお願致します。急峻な山肌に棚のように重なり、四季折々に様々な姿を見せてくれる棚田。基盤整備が進み、農家の高齢化、後継者不足もあり、いつしか棚田は厄介者。

関係のない人は、収益性のないものは必要なしと言ひ、またある人は、自然保護が大事だから残すべきだといながら農家の苦勞を理解しようとしなひ。

そして棚田は放棄され、棚田が持つていた保水力は無くなり、水の循環全体に影響を及ぼす。その結果、草や虫やひいては人の生活まで脅かすことになる。

突き詰めれば「いつなるか」ですが、それはいつかは「いつか」。棚田を理解すること、理解する人

を増やすこと、個々が出来る範囲で手を差しのべることではないでしょうか。

幸いにも各地で保存の取り組みがなされ、ネットワークがつけられ国をはじめとする行政も力を入れております。

この会は、そういった方々の情報交換の場となればよいと考えております。

各地の取り組み、悩んでいること、各種行事開催、意見(事務局に物申すでも大いに結構)、保存に関するアイデア、なんでも結構です。

自由にして真剣に意見交換が出来る場が必要であり大切です。その中に問題解決のヒントが隠れていたりするものです。

皆様のご意見及び情報提供をお待ちしております。また、随時会員募集も行っております。人の輪を広げましょう。

平成14年度事務局

石川県輪島市役所漆器観光課

☎(0768)23-1146

FAX(0768)23-1148

石川県輪島市二ツ屋町2-29

T0928-8525

協議会HP=

<http://www.yukidaruma.or.jp/tanada/>

全国棚田(千枚田)連絡協議会の今後を考える

新潟県塚塚町 助役 丸山 新

今年も棚田に早苗が植えられ、夏の日差しをつけて水面にゆれている。米あまりのなかでも実り多き秋を迎えたいと願わずにはいられない。

棚田という存在がクローズアップされて、はや丸7年がたち、全国棚田サミットも今年は8回目を迎える。平成7年高知県梶原町前町長の中越準一さんが、棚田を抱える自治体や多くの人々に呼びかけられて全国棚田連絡協議会が発足し、われわれはその目的に向かって棚田をアピールしてきた。

棚田は会員の共通認識として、生産、景観保全、環境保護、水資源の涵養、国土保全、農村文化(衣食住)などの多面性であり、それを維持し守り続けてきた人々の志である。

そのことが実って、棚田保全事業や中山間地域直接支払が制度化され、また年一回のサミットもそれぞれの開催地が棚田をテーマに開催してきた。その意義を高く評価したい。

しかし、国民の理解度は果たしてどうだろうか。まだまだ時間がかかるような気がするし、もって将来を見すえた取り組みが必要ではないかと思つた。

昭和37年農業基本法が制定され、生産を主な柱に足腰の強い自立農家の育成に力を注ぎ、農業基盤の充実をはじめ、構造改革に取り組んできた。(この)この成果は論をまたない)そして平成12年食料・農業・農村基本法が新しく制定され、この中ではじめに中山間地域の振興が明確にされたのである。今後、中山間地域の振興や棚田保全はとうすれば期待に

応えられるのだろうか。

いままでもなく棚田地域は、生産効率が高く担い手不足や高齢化、人口減少など、いたって厳しい課題が多く、集落の維持さえできなくなるのではないかと懸念がある。反面、多面的機能や自然の恵み、文化を含めた生活の仕組みすべてが凝縮されていて、まさに棚田地域は心身ともに健康で日々輝き、幸せ感のある生き方ができるところ、国民の心ふるさとと言っても過言ではない。このギャップをどうなくすか、どう縮めることができるかが鍵である。

その鍵は、農村と都市の共生であり理解を求めて行くために、相互に協調しあい新しい仕組みをつくることである。もちろん、棚田地域に住んでいる人々が自信をもって開かれた地域と受け皿をつくるのが前提になる。そのためにも、本協議会の役割は大きくもつと、都市住民を巻き込んだ活動をするところにあるのではないが、そう提案したい。そのためには、

1、いろいろな情報や棚田地域にできない企画を都市向けに発信し実践

たとえば、(1)「安全な食料生産地」として棚田米や農産加工品の生産と販売 (2)「食の原点」として地元食材を使った「食文化」の復活・発信 (3)「棚田の生態系をふくめた環境教育」(4)「自然体験、農村体験の棚田ツアー、(棚田列車ツアー、空飛ぶ棚田ツアーなんて面白い)」「美しい景観と草刈りの省力を兼ね、畦畔に花を植えてのお花見(花つみ)

ツアー」など、わが町では遊び感覚でこの素晴らしい農村空間に滞在し、「食農教育の場」として都会の小中学生の田舎体験教育旅行が年々増え、農家民泊も好評で少しずつ農村が理解されてきていることはありがたいことである。そのほか、(5)写真、絵画、詩、音楽(コンサート)、物語の募集や展示発表会(6)伝統芸能文化などの伝承(7)全国縄なし選手権や遊びのイベントなど、各地域が単独で行っていることを互いに連携しあい、都市の人々を巻き込む活動に転じていくことも必要だろう。

そのために(8)連絡協議会会員を増やし、ライセンスをたくさんの人から読んでもらい、情報の受信を積極的に行うことも必要だ。さらには当事者側として、

2、持続可能な地域、農業体制づくりの実践

それは、(1)農地保全(2)安全な食料生産地として持続可能な農業展開をするために(3)担い手確保や棚田サポーターの協力体制や(4)所得の安定向上など、またまだいろいろなことが考えられるが、1の都市向けの実践と連動しながら、総合的な取り組みが急務である。

いま本協議会はネットワークをフルに活用し、新しい展開に取り組み時期を迎えているのではないだろうか。全国棚田サミットの場もいまよりもっと深い具体的議論の場、政策提言の場、決議の場であると同時に農村と都市の架け橋であってほしい。そのために、明日の棚田地域を自らの手でデザインするつもりで。

情報・BOOKS

●棚田学会シンポジウム「棚田を活かす」

8月4日(日)14:45、東京日本橋三越劇場にて、棚田学会主催のシンポジウムが開催される。今年のテーマは「棚田を活かす」。長野県飯山市から小山邦武市長、高知県梶原町から、都市から町に移り住んだ田村俊夫さん、山形上山市から農林作家の佐藤藤三郎さんを迎えて、報告およびパネルディスカッション(コーディネーター・農林水産政策研究所長・篠原孝さん)が行われる。資料代1000円。問・棚田学会事務局 042-381-6721

●「房総の棚田展」開催

7月20日〜8月11日まで、東京湾を横断する東京アクアラインの海ほたる4階「海かぜテラス」にて、「房総の棚田展」が開催される。時間は9:30〜16:30まで、入場無料。応募総数730余の写真コンテンツの中から選ばれた棚田写真展示のほか、「棚田の四季とくらし」がわかるジオラマ展示や全国棚田サミットのPRなどが行われる。問・鴨川市農林水産課 0470-93-7834

●高根県柿木村「大共谷の棚田」大共谷の棚田歴史研究部調査報告書

島根県柿木村教育委員会から、地元大共谷棚田の歴史民俗調査の結果をまとめた報告書が発行された。調査は、3年間、棚田の現況、棚田の歴史、棚田の民俗、棚田の石垣の4分野にわたって行われ、田1枚ごとの構造及び石垣実測等、利水畜道調査をはじめ、地域固有の歴史・豊富な民俗文化を明らかにした。A4版190ページ。問・柿木村教育委員会 0856-79-2553

新しく会員になったみなさま

正会員<自治体> 岡山県久米南町

棚田の保全・中山間地域活性化のための全国組織
全国棚田(千枚田)連絡協議会
お申し込み・お問い合わせは協議会事務局
石川県輪島市役所漆器観光課内



〒928-8525 石川県輪島市二ツ屋町2-29
TEL:0768-23-1146 FAX:0768-23-1148
協議会HP: <http://www.yukidaruma.or.jp/tanada/>

編集後記

アンケートにご協力くださったみなさま、本当にありがとうございました。個人的にもいろいろな方と棚田談議をする機会に恵まれ、わたくしは「棚田伝道師」のようでありました。私事で恐縮ですが、4月にインドネシア・バリの棚田とバリ文化に少しばかり触れてきました。そこにあったのは、生活文化・精神文化と農業の営みが、分離することなく、一体となった濃密な世界。農耕も含め、一人ひとりの生活が「文化」や「芸術」をつむぎ出していたのです。それに対し「文化」を消費することで生活している自分…。日本の棚田地域、農山村でも、か細くはなっているけれども「文化」と一体となった農のくらしを確実に見ることができました。田や水の神への祈り、食、神楽など芸能、共同体の営み…。わたくしは、いつもこの豊かさを求めて棚田地域へ足を運んでいたのだと痛感しました。「棚田ライセンス」を通して、この豊かさをさらに豊かにしていくお手伝いができればと思っています。さて、今年の棚田サミットももう間近。熱い議論を聞きに、また交流を深めに千葉・鴨川へ出かけたいと思います。会場でわたくしを見かけたら「この原稿載せて〜」うち、いまこれに取り組んでいます!」などなど、遠慮なくお声をかけてくださいませ。お待ちしております。 石井里津子